様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０４４１３

研究課題名（和文）国際バカロレアにおける美術教育-中等課程を中心として-

研究課題名（英文）Research on visual arts education in International Baccalaureate(IB)focusing on Middle Years Program(MYP)

研究代表者
小池　研二（Koike, Kenji）

横浜国立大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０５２８３８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：国際バカロレア（IB）の美術教育について中等教育プログラム（Middle Years Programme＝MYP）を中心にプログラムの内容を調査し，日本の美術教育に生かせる点は何かを明らかかする。①IBの各プログラムの美術教育は探究的な学びであることが明らかになった。②MYPを中心にディプロマプログラム（Diploma Programme ＝DP）との関連性が強いことが確認できた。③IBの構成主義的な学習による概念理解について、日本の美術教育に応用が可能であり有効なことがわかった。④社会教育施設での学びについてIBの考え方と共通する部分が多いことがわかった。

研究成果の概要（英文）：This study was to investigate the contents of the program of International Baccalaureate（IB）focusing on the secondary education program of Middle Years Program（MYP）, and to raise a few suggestions to better use of them in the art education of Japan.１）The revised MYP strengthened the continuity among PYP, MYP, and Diploma Program. ２）Comparative study between MYP and the Japanese evaluation showed that introduction of the MYP concepts became easier for junior high schools in Japan to accept. ３）Study on outcome of MYP method at a junior high school in Japan.４）Interviews with the MYP, DP students and teachers showed that they acknowledged that their thoughts were deepened by DP TOK. ５）Field survey at IB schools confirmed that learning was being done constructively. ６）Learning activities at the museums showed that there were many common policies between them and the IB learning.

研究分野：美術科教育

キーワード：国際バカロレア　中等教育プログラム（MYP）　美術教育　探究的な学び　概念理解

１．研究開始当初の背景

国際バカロレア（International Baccalaureate 以下 IB）はスイスの財団法人国際バカロレア機構（IBO）が定める教育プログラム、及びその資格の総称であり、中等教育プログラム（Middle Years Program 以下 MYP）の他に初等教育プログラム（Primary Years Programme　以下 PYP)、ディプロマプログラム（Diploma Programme　以下 DP）IB キャリア関連プログラム（IB Career-related Programmme 以下 CP)の各プログラムがある。2017 年現在 140 カ国以上に、100 万人以上の児童生徒が学んでいる。IB に関しては日本でも 2013 年に IB の DP 認定校等を 5 年以内に 200 校にする方針が発表され、一部日本語による DP 実施を IBO と文部科学省とで合意するなど急速に関心が高まったところである。しかし、学校現場では依然として認知度は低く、「IB＝インターナショナルスクールのための特殊な教育である」「学習指導要領のある我が国の教育とは両立しない」等様々な意見が筆者の周囲でもあり IB の教育内容の捉え方が決して十分でない現状がある。このような中で「グローバル化の切り札」として IB があたかも英語教育をするための一手段というような、十分な理解がないままで広がっていくことは決して日本の教育にプラスになるとは思えない。「多文化に対する理解と尊重」「探究心、知識、思いやりのある若者の育成」といった IB の理念をしっかりと捉え、美術教育を始めとする各教科や様々なシステムについての地道な基礎研究が知識基盤社会となる今後の日本の教育には必要である。そのような中で 2014 年に MYP の改訂があった。改訂された MYP を中心とする各プログラムの最新状況を調査し、それぞれの特徴を明らかにすること、そして IB の学習の理念や方法を日本の教育に生かすことは大いに意義があると考える。IBO は「国や地域の教育システムの要件を取り入れやすくして、フレームワーク（枠組み）として提供されている MYP の導入を容易にすること」[1)]を強調しており、IB＝特別な学校のための教育プログラムではなく、日本の学校にもそのよさを応用することは可能でありそのための研究が必要であると考えている。

２．研究の目的

(1) 国際バカロレア（IB ）の美術教育の内容を調査する。文献調査、学校等の現地調査等から国際バカロレアの各プログラム及び、各プログラムの美術教育の特徴について明らかにする。

(2) 中等教育プログラム（MYP）は 2014 年に改訂しており、 改訂後の各プログラムとの連続性及び関連性について、美術教育を中心に調査する。特にディプロマプログラム（Diploma Programme ＝DP）との関連性について調査することにより、IB プログラムの連続性について美術科を中心に明らかにする。

(3) IB は構成主義に基づいた探究的な学びを行っており、構成主義的な学習における概念理解について、日本の中学校における美術教育に IB の教育が応用可能なのかを明らかにする。

(4) 国内外の IB 実施校の現状を調査する。IB 実施校の美術教育がどのように行われているのか、最新の状況を現地に行き、授業参観、担当者へのインタビュー等から調査する。

(5) 社会教育施設での美術を中心とした学際的な学びについて IB の理念及び視点から調査し、社会とつながる美術教育について研究する。グローバル教育の必要性が叫ばれている現在において IB の美術教育の意義をこれまでの研究の蓄積を踏まえながら調査を続行し、学習指導要領に則った日本の中学校教育の中で MYP を生かした学習指導のあり方等具体的な分析を行うことが本研究の目的である。

３．研究の方法

(1) IB の最新の内容調査について、IBO が発行している公式ガイドブック等の出版物、IB についての国内外の学術論文等の文献調査を行った。公式ガイドブック等は日本語に翻訳されたものも多く出てきているが未だ十分でなく、英文のものも当たるようにした。IB 実施校を実地調査し、生徒や教員に対してインタビュー等を行い、最新事情について調査した。

(2) 各プログラムの連続性について、それぞれのプログラムの特徴を文献等から調査した。また、IB 実施校を実地調査した。特に、東京学芸大学附属国際中等教育学校（以後学芸国際中）が 2015 年に DP デュアルランゲージプログラム認定校になり 2017 年度に DP1 期生を送り出した。学芸国際中の教師及び生徒にインタビューを行い、MYP、DP それぞれのプログラムの特徴や連続性について調査を行った。インタビューした内容について質的データ化し，分析を試みた。

(3) IB における構成主義に基づいた探究的な学びによる概念理解を目指した学習を日本の美術教育に生かすことができるかを横浜国立大学教育学部附属横浜中学校（以下附属横浜中）で実践研究を行った。美術科担当教師に IB の教育の特徴について説明をした上で授業の中で MYP の探究的な学びを行うための概念、テーマ、問い等を設定し、概念理解を促すような授業を展開し、授業後に生徒に対してアンケート調査を行い分析した。

(4) IB 実施校について授業参観、担当者に対するインタビュー、作品やワークブックなど

の資料調査、生徒の展覧会調査等を行った。特に、改訂後のMYP、DPの最新の授業内容や教師及び生徒の考えを直接聞くことができた。

(5) 美術館、博物館等の社会教育施設について現地調査を行い、IBの視点から調査を行った。「地域の芸術家やコレクションにかかわることや、美術館、ギャラリー、展覧会その他の発表などを見学に行くことは、生徒の調査にとって有益な直接的体験の機会となります」[2)] というようにIBでも社会教育施設は重視している。社会とのつながり、さらには教科を超えた探究的な学習という面から博物館等の学習について海外の施設を調査した。

４．研究成果

(1) IBの最新の内容について以下のことが明らかになった。

①改訂後のMYPについて本研究では評価を中心に調査をおこなった。その結果評価規準は、「A：知識と理解（Knowing and understanding)」「B:技能の発展(Developing skills）」「C:創造的思考（Thinking creatively)」「D:鑑賞（Responding)」の4つとなったこと、従前は最終学年度だけ評価表が示されていたものが全ての学年で参考にできるように明確に示されたこと、4つの評価規準の点数が統一されたこと、等が明らかになった。また、MYPの4つの評価規準を日本の4つの評価の観点と比較することにより、美術科に関してはMYPの評価規準と日本の評価の観点との間には、日本の評価の観点にある、関心意欲態度に対応する規準が見つけにくいなどの差異はあるが、その差は極端ではなく、IBの学習者像などIBの理念を踏まえて指導評価していくことが可能であるといった日本の学校でMYPを実施する場合の対応例を示した。

②DP について日本の美術教育に導入または参考にすべき点は何かを明らかにした。DPにおいても 2015 年に第 1 回の試験を実施するための新プログラムが開始され最新の状況を調査した。美術科では、芸術科全体で6個、美術科独自で3個のねらいがあり、それを受けて「1:特定の学習内容の知識と理解」「2:知識と理解の応用と分析」「3:総合し分析、判断する力」「4:適切な技能や技法の選択、活用、および応用」の4個の評価目標が作られている。さらに、「文脈に沿った美術」「美術の方法」「美術のコミュニケーション」の3個の学習領域のあるシラバスに沿って、「理論的実践」「作品制作の実践」「キュレーションの実践」を行い、設定された評価課題を内部及び外部の評価者が評価する。これらの内容を日本の学習指導要領と比較検討した結果、文脈による理解、キュレーションの意味まで考えること、学習一般のスキルまで求めているなど、日本の美術と違いがあるものの、方向性に大きな差異はないこと、ただし、厳格な資格としての面が強く、導入等に際しては正しい理解が必要なことが確認された。

(2) 各プログラムの連続性について文献等から、より連続性が高まっていることが確認された。それは、PYP 及び MYP で概念等が具体的に示され DP の学習につながりやすいこと、PYPで示されている「教科横断的テーマ」とMYPに設定された「グローバルな文脈」が対応して示されていること等からも確認できた。IBは全てのプログラムが独立しており、必ずしも全てを連続して学ぶことを求めてはいない。しかし、前述のようなPYPとMYPとの連続性の強化や「グローバルな文脈」を通じて批判的に考える能力、振り返りを実践する能力、つながりを見つける能力を身に付け TOK に向けた準備を進める というように PYP→MYP→DP といった学習の連続性がより一層強まったのは事実であり、日本の教育でも重視している学校間における連続性を考えて行く上でこのシステムを研究する価値は高いことが確認できた。

(3) IBの当事者はどのようにIBを捉えているか調査した。IB実施校である学芸国際中でDPを学ぶ生徒とMYP及びDPを担当する教師にインタビューを行い、文献等ではわからない学校現場での状況について調査を行った。対象生徒はDP受講生徒全8名のうちの7名であった。インタビューから以下のことがわかった。

①生徒がIBについて思っていること。DPの学習は決して楽なものではなく、厳しいものであることを生徒は十分自覚しているが、学習することの楽しさを DP の高度な学習内容の中から感じ取っていることがわかった。美術に関しては、自分たちの表現したいものを友達と議論しながら作り出していくことに楽しさを感じていることが改めてわかった。また、完成作品だけを重視せず調査研究段階や展示段階も重視する IB の美術の学習について理解を示している生徒が多いこともわかった。さらに単なる絵画や彫刻を学ぶのではなく、社会全体に関することや、自分たちの内面に関することを、造形活動を通して学んでいくことに生徒は純粋に興味を持っており、しかもこれまでは美術の表現方法とは思っていなかったコンピュータや映像機器等の活用によって表現の世界が広がったことに生徒たちは自身の表現における新たな可能性を見いだしていた。これは日本の美術科においても重要なことであり、今後の授業でも生かしていくべき内容であると考える。

②教師に関してわかったこと。美術を担当している教師は3名にインタビューした。3名はそれぞれ、米国人でDP担当（a)、DP及びMYP 担当（b)、MYP 担当（c）と担当が違い、また経歴も違っていた。(a）は、米国の美術教育と比較して IB は調査研究の比重が高い

ことを述べている。また学芸国際中のユニークな状況に興味を強く持っていることが確認できた。(b) からは IB プログラムにおける美術と TOK との関係が深いこと、MYP と DP とのつながりから, DP だけ実施することは難しく、MYP から行う必要性が IB を総合的に身に付けるということからも意味があること等が確認できた。(c) からはルーブリックを活用する評価について、より一層妥当性を持って生徒の能力が表れるようなルーブリックの必要性について考えを聞くことができた。また新学習指導要領をみると、それは IB の方針に近づいているように感じられるとのことであった。

③総合的にわかったこと。

教師と生徒から直接話を聞くことができ MYP と DP のつながりの重要性が明らかになった。MYP と DP はどちらも IB のプログラムであるから, 関係性, 連続性があるように作られている。IB は必ずしも MYP と DP を連続して行わなければならないとはしていないが, 今回見てきただけでも連続して行うことに IB の理念に沿った学習を効果的に行うことができ、それが IB の理念や考え方を学ぶことになると考えていることがわかった。MYP と DP との連続性について探究的な学びを行い、概念理解をするものであるが、語学の壁等の難しさも生徒が感じている等問題点もある。インタビューの結果から得られた MYP と DP の連続した概念的な学びについてまとめたイメージを図 1 に示した。

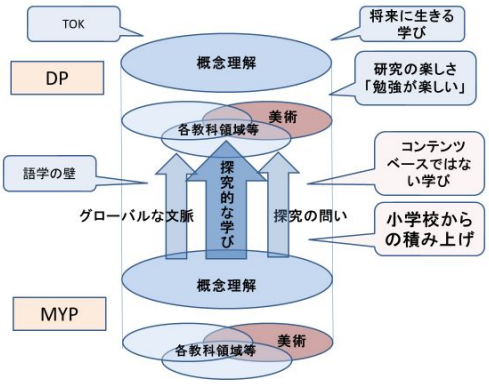

図 1 連続した概念的学び（小池作成）

(4) 探究的な学びによる概念理解を目指した学習を日本の学習指導要領を実施している中学校での美術教育に生かすことができるか調査した結果以下のこと等がわかった。

①2016 年度の調査

生徒が概念をどう捉えたかについて見ると、1 年生では「ものの見方」、2 年生「コミュニケーション」、3 年生「文化」「美意識」といった概念についてそれぞれ 73～74%の生徒が考えたと答えている。しかし同項目の自由記述を見ると概念的な思考まで及んでいると判断できる生徒は 1 年生 30%、2 年生 34%、3 年生 13%となった。語句の表面的な意味については理解しているが深い概念的な理解にまで十分に及んでいないことが確認できた。

②2017 年度の調査

MYP に設定されている「事実的問い」「概念的問い」「議論的問い」の「探究の問い」に着目した。「探究の問い」を考えて制作をすることで, 生徒の概念的な理解が深まり, 美術を身近なものと感じられるかを調査した。学習の内容を深く理解し議論を可能にする「議論的な問い」に対して「自分なりの答えが持てた」と答えた生徒は 1 年生 88%、2 年生 83%、3 年生 87%と高い割合を示した。その項目の自由記述についても 1 年生 55%、2 年生 79%、3 年生 72%の生徒が有効に回答していると判断できた。これらの結果から、教師側が探究的な問いを設定して意図的に問えば題材の表面だけでなく概念的な意味まで考える生徒が多く存在することがわかった。

(5)国内外の IB 実施校での調査を行い、次のことが確認できた（学芸国際中以外）。

①市立札幌開成中等教育学校。2017 年 3 月に日本の公立学校で初めて MYP 認定校になっている 。公立学校での IB 選択の理由, MYP の魅力, 運営上の難しさ等を直接インタビューすることができた。札幌開成へは 2016 年 6 月 16 日に訪問し美術科の授業参観及び IB コーディネーターに話を聞いた。インタビューによると、課題探究型の学校を作っていくために IB を導入するのであり、いわゆる英語力を高めるとか、進学校を作るためでないことがわかり、IB の意義を考えた学校運営であることがわかった。

②香港の IB 実施校の調査。2016 年 3 月 7 日 香港アカデミー　Hong Kong Academy、　3 月 8 日　アイランドスクール　Island School、3 月 9 日、　香港アートセンター　Hong Kong Arts Centre、3 月 10, 11 日　カナディアンインターナショナルスクール　The Canadian International School of Hong Kong　を調査した。その結果、教師がどのように IB を捉えているか, 困難な点は何かなどを聞くことができた。授業の様子もじっくりと見ることができ、授業が少人数でゆったりと行われていること, 概念を考える授業であること、プロセスジャーナルが重要な位置を占めていることなどが確認できた。

③シンガポールの IB 実施校の調査。2017 年 3 月 1, 2 日　ジャーマンヨーロピアンスクールシンガポール The German European School Singapore (GESS)、3 月 2, 3 日　UWC サウスイーストアジア（ドーバーキャンパス）UWC South East Asia (Dover)を調査した。GESS, UWC ともに卒業展覧会も調査することができた。卒業展覧会は DP アートでは重視されており、実際にはどのように行われるか調査した。ともに一般向けのものであったが, 生徒たちのレベルは高く、展示方法も工夫してい

ることなどがわかった。授業に関してはプロセスジャーナルを見ることもできた。UWC Seaでのインタビューでは IB 美術科で教えることについて教師の心情も聞くことができた。
④ジャカルタの IB 実施校の調査。2017 年 12 月 4 日　シカルインターナショナルスクール Sekolah Cikal 、12 月 5 日　ツナスムッダインターナショナルスクール Tunas Muda School を調査した。美術科教師、学校長、IB コーディネーター等に面会することができ、学校全体の状況、教育方針、IB の普及状況等を直接聞くことができた。美術科教師からは IB プロセスジャーナル、ワークシート、年間計画等の資料を直接提示され確認することができた。探究的な学びを実施していることが確認できた。また、IB といえども、教師によってそれぞれの特色を出して授業を行っていることが確認できた。

(6)海外における美術館、博物館等の社会教育施設について現地調査を行い社会とのつながりや実践的に学んでいくことなど IB の学習理念から各施設の教育活動について調査を行った。
①香港アートセンター。2016 年 3 月 9 日に調査した。担当者へのインタビュー、ギャラリー等の施設調査を行った。ここでは、アートを身近なものにする試みをしており、IB の美術も生活とつながること，自分の問題として社会的な文脈から美術＝アートを捉えていくことを重視している等から IB の理念と共通性が高いことが確認できた。市民の美術を考えていく場合，このような施設を活用したり，協力したりしていくことはこれからの美術では重要なことであることが確認できた。
②シンガポール国立博物館。2017 年 3 月 6 日に調査した。教育プログラムの見学及び担当者へのインタビュー調査から教育プログラムがナショナルカリキュラムとどう関連するかが明示されていること、社会教育と学校教育の関連性が示されていることがわかった。2013 年の調査では美術と社会科との関連性等を見ることができたが今回の調査では歴史と社会科等の関連性を見るに留まった。そういった意味では教科横断性は弱まったと言えるが，それでも，ファッション，映画等の市民の多様な文化における関連性は今回でも見ることができた。
③ジャカルタ国立博物館。2017 年 12 月 2 日に調査をした。一部立て替え工事中と言うこともあり、担当者に会うことができなかった。また、資料や展示等を確認したところ、教育プログラム等の充実については今後に発展の余地がある印象を受けた。12 月 5 日に民間の美術展示施設「ART1」を調査した。担当者とも会うことができた。現代アートを扱う展示し施設であり、調査当日も高校生若しくは美術系学校生徒と思われる団体が鑑賞活動を行っていた。
引用文献
1) “Middle Years Program Arts guide” IBO, 2014
2) International Baccalaureate Organization『 ディプロマプログラム（ＤＰ）「美術」指導の手引き（原題 Visual arts guide)』IBO，2016

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 8 件）
①小池研二、「国際バカロレア中等教育プログラムを生かした術科授業の実践研究（2)」、『美術教育学研究』50 号、大学美術教育学会、2018、pp.161-168、査読有

②小池研二、「学習指導要領の改訂の趣旨と国際バカロレア初等教育プログラム（PYP）の比較による一考察」、『美術教育の理論と実践』、日本教育大学協会全国美術部門関東支部会、2018、（掲載決定、pp.41-58)、査読無

③小池研二、「国際標準の美術教育について考える－ユネスコスクールと国際バカロレアの学びから－」、『教育美術』、79 巻第 3 号（第 909 号)、教育美術振興会、2018、pp.32-35、査読無

④小池研二、「当事者から見た国際バカロレアの美術教育」、『横浜国立大学教育学部紀要. Ｉ，（教育科学)』1 巻、2018、pp.33-57（電子版のみ)、査読無

⑤小池研二、「国際バカロレア中等教育プログラムを生かした美術科授業の実践研究」、『美術教育学研究』、49 号、大学美術教育学会、2017、pp.161-168、査読有

⑥小池研二、「国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）美術科についての考察－DP 美術科のねらい，目標，シラバスを中心に－」、『美術教育学』、38 号、美術科教育学会、2017、pp.213-224、査読有

⑦小池研二、「香港における国際バカロレア実施校の美術教育」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要. Ｉ，（教育科学)』19 巻、2017、pp.58-84（電子版のみ)、査読無

⑧小池研二、「国際バカロレア中等課程プログラム（IBMYP）の改訂について（2）－評価を中心に－」、『美術教育学』37 号、美術科教育学会、2016、pp.219-231、査読有

〔学会発表〕（計 2 件）
①小池研二、「国際バカロレアでの美術の学びについて －ATL（Approaches to learning）の理論を中心に－」、第４０回美術科教育学会滋賀大会、2018

②小池研二、「国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）美術科についての考察-DP

美術科のねらい，目標，シラバスを中心に-」、
第 39 回美術科教育学会静岡大会、2017

６．研究組織
(1)研究代表者
小池　研二（KOIKE, Kenji）
横浜国立大学・教育学部・准教授
研究者番号：90528382

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
飯田　哲昭　（IIDA, Tetsuaki）
横浜国立大学教育学部附属横浜中学校・教諭

後藤　保紀　（GOTO, Yasunori）
東京学芸大学附属国際中等教育学校・教諭

嶽　里永子　（TAKE, Rieko）
東京学芸大学附属国際中等教育学校・教諭